

五原縣志

できた。それは、沖縄の「土地闘争」の原点となり、その後の日本復帰運動においても、非暴力主義を貫いていった。ベトナム戦争時には米軍の原爆投下訓練場になつた伊江島で、ミサイル発射訓練を阻止する運動を開いたり、たたかいで原点となる団結道場を米軍の妨害に屈せずに建設した。

一九七二年日本復帰後は、米軍の「銃剣とブルドーザー」に代わって日本政府が土地を強制接收していく。「軍用地契約拒否」を貫きながら平和な島を取り戻すために、「八四年『反戦平和資料館』」と国内外の人たちと「平和交流」を図る場となつている「わびあいの里」を建設した。そこで素朴な言葉で語る阿波根昌鴻に接してきた。平和な心の琴線に触れ、深い感銘をうけてきた。

筆者が阿波根昌鴻の平和な心の源流にたどり着いたのは、伊江島の戦闘の最中さえ奇跡的に所持できた「聖書」の余白に刻印された文字に接したときである。米軍上陸直前の猛爆撃下の伊江島で、猛攻が中断するや「北海岸ホラ穴の木陰にて、独り。読書、天下泰平の氣序」である。

が、多数の家畜に飼料を与えつつ、「家畜につらい目に合したくない。戦争は人間がしておるのだと思うと、家畜がますます可愛くなり、気の毒に思う。春だ草も伸びて待つていい」などと、驚嘆すべき超人的心境を記している。さらに、米軍の捕虜となり、渡嘉敷島へ移動・収容されたとき、「戦争、世に人以上の悪魔が他にあろーか、如何なる動物も人以上の殺し合いは見ないのである。」と真情を吐露している。島では日本軍の住民虐殺が発生し、沖縄南部の戦線では日米最後の激闘が展開し、地獄の惨状を呈している時期だつた。